

明日を紡ぐ

「紡績女工」から、母、祖母への生活記録と四日市公害を記録する運動

生活記録運動と公害の記録運動

澤井余志郎 三重県四日市市

私は今年(2008年)8月で80歳になる。1951年(昭和26年)から生活記録運動に関わるようになって57年ということになり、この間、文集づくりや公害記録の仕事は、もっぱらガリ版での鉄筆、その後はコンマ3ミリといったボールペンでの筆記で、10年ほど前、指が曲がったような状態になり、細かな字を書くと指が痛く書けなくなったので、それを機に、記録「公害」のガリ版パンフは60号で作るのをやめた。

その頃、私はシルバー人材センターの役員になり、会報の編集などに携わっていて、年寄りの間でもパソコンがはやっていたが、「今さらパソコンなんて…」と、軽蔑し無関心でいたが、書く手段がない以上、運動にならない。

シルバーセンターの事務局長は、私同様、くるべまたお(訓覇也男)さんが仲人した人で、パソコンが得意だった。肺ガンであと半年の命だと告げられていたくるべさんが、死ぬ前に財産処分をしておくとして、私に公害資料館用にと100万円、事務局長にはシルバーでパソコンを20台ほど買うようにと金を渡してくれた。

シルバーではさっそくパソコンを買い、受講希望者を募ったら、受付開始1時間ほどで、定員の3倍ほどの申し込みがあった。私も、書く手段を得るために受講した。家では、鈴鹿医療科学大学事務所に勤めている娘が、使い古しのパソコンを持ってきてくれた。(その後、娘二人が新しいノートパソコンを買ってきてくれた)

パソコンは、キーを一つずつ叩いての文書作成で、時間はかかるが、習っておいてよかったと、文集『明日を紡ぐ』に送ってきた皆の綴り方を、「書けない…」などと言っておきながら、ようこまで長い綴り方を書いたなど、感心したり、喜んだりしながらキーを叩いている。

四日市公害では、私は、「語りべ」「生き証人」「便利屋」などと呼ばれている。現在、主に関わっているのは、小学校5年生の社会科「四大公害裁判」の単元で、今時の先生にはその体験はなく、どこで知なのか、私の自宅に「語りべをお願いします」と電話で話があり、前もって『四日市公害学習案内』など手作りの教材参考資料や、ビデオテープを送り、市県外からは激甚校だった塩浜小学校を借りての学習、市内校はその学校へ出かけての学習で、これには、公害裁判原告患者で漁師の野田之一さんと、コンビナート定年退職者の山本勝治さんの三人で語りべをしている。年に10校以上あり、すべてボランティアで奉仕している。

このほかにも、最近公害激甚地で漁師町の磯津の公害患者の会会長が亡くなった。新聞テレビがそれを報道する際、記者たちも以前のことは知らないから、故人の家族に聞くわけだが、家族は「病気以外の活動などのことは澤井さんに聞いてくれ」となり、その対応に大変である。テレビ局からは、電話取材で「澤井さんにもらった『四日市公害記録写真集』がいま手元にある、なんページに故人が載っているか」と問い合わせがあり、急いでその写真集を広げ、どこどこと、そのページを示すと、夕方のニュースで、いかにも現地取材したように放送されている。談話はどこも、澤井が「故人が亡くなったことで、いっそう公害の風化が進むと言っている」と、同じようなことが書かれ、放送されている。

四日市市には、市環境学習センターがあり、その中の「四日市公害資料室」には、私が提供

した資料がおかれている。一週間ほど前、北海道のある大学の先生から電話で、「四日市公害について調査研究をしたいので、市の環境学習センターの所長さんをお願いしたら、澤井さんが詳しいからと紹介されました。3月中旬に行きますので、よろしく」とのこと。「はい」と返事をしたものの、確かに私の方が所長より詳しいが、だからといって簡単に丸投げしていいのかよ、と思ったが、いつものことであり、予定表に記入した。

こうしたことをしていると、いまは、インターネットで簡単に検索できるので、書く賃小学校教員から、「四日市ぜんそくの資料がほしい」などと、電話やメールがくると、子どもにしっかり学習させてやってほしいと思い、あれこれの資料(パンフ)や、ビデオテープを送ったりする。最初のうちは、「資料が着いた」の葉書くらい寄越してもいいのにと考えたが、今では、送っても返事がないとあきらめているので、はがき云々は思わないようになっている。

あるとき、四日市市内の教室で、公害の話をして質問になったら、「公害裁判で支援活動をしてきたとき、お金になりましたか」と質問された。返事に困った。「お金にはなりません」と返事したら「お金にならないのに、何で公害患者の応援をするんですか」と想定外の質問にどぎまぎしながら、「公害患者は何もわるいことをしていないのにぜんそくになって苦しんでいる、私はぜんそくにならずにすんでいるから、患者さんのためになることをやっています」と答えたが、答える方も、聞く方も納得はしなかったようである。終わってから担任教師に「とんでもないことを、失礼なことをお聞きして申し訳ありません」と謝られたが、子どもは素直でいいと思った。

コンビナート工場とは道路一本で隣接している、塩浜小学校は、公害激甚校だったことから、今でも、蛇口 40 個ついた、かつての「うがい室」が 6 カ所あり、年間 10 校ほど、5 年生が公害学習にくるので、3 人で語りべをしている。教頭・校長とも塩浜小学校の置かれた立場っていうか、存在意義を認められていて、県内外の学校から連絡があると、うがい室、展望室、視聴覚室などの利用を快く承諾してくれる。そんなとき、女性教頭が「公害よりも、澤井さんの生き様を勉強したらいいのにね」と、さらっと言った。「なんで…」と聞き返そうとしたが、聞くこともせず終わった。

この教頭先生の他にも、「なんで、公害にこだわってしんどい語りべなんかを続けているんですか」などと聞かれることがある。「これこれだから…」とすぐに返答できるものをもちあわせていないので、そういう場合、正直返答に困る。先ずすんなり言えるのは、「かつて紡績工場で女子工員たちと生活記録をやってきたから…」である。その生活記録運動がなかったら、今の自分は存在しないと思っているし、何よりも、その生活記録運動で私は人間として成長できたと、女子工員なかまたちに感謝している。

けれども、その最後まで私同様、生活記録運動にこだわってきた女子工員、綴り方のなかまたちは、本当のところどう思っているのかをその時々々に気にしている。確信しているが、生活記録運動の中で、特に澤井解雇事件などで、解雇後も、澤井応援をするなかまたちを、会社側から、労組幹部から、そして親たちから、ずいぶん苦しい思いをさせられ、運動から離れざるを得なかったなかまも含め、澤井と関わらなかつたら、生活記録に関わらなかつたら、あんなにもひどい弾圧で苦しみを味わうこともなく、婚期がきたら、いやな村とも思わず、家で決めた結婚にすんなり入っていただろうにと思い、申し訳ないと思ったりもする。本当のところ、みんなは、生活記録運動や、澤井について、どう思っているのだろうか、いまも気になっているので、自分のやってきたこと、思ってきたことなどを、振り返ってみることにした。

浜松工業学校紡織科へ

1941年(昭和16年)3月、小学校6年生の時、担任教師から「これがおまえの受験票だ」と渡された学校は、普通中学校(進学校)ではなく、実業学校の紡織科であった。兄二人は普通中学校で、旧制高校へ進学している。「なんでおれだけ工業学校や」と親父に文句を言った。

クラスの仲良しだった友達が、「おらんとこあんねー(姉)は、女中にも使ってもらえんで、紡績のばたんこ(女工)になった」と言った言葉が脳裏に強く刻まれていたこともあり、入学試験を受けに行ったとき、白紙答案で落第しようと覚悟を決めて学校へ行った。その年は太平洋戦争の始まる年であったのか、ペーパーテストではなく、口頭試問であった。いい加減な返答をしたが、発表日、桜の花は散っていないで、咲いていた。

紡織科は35人ほどで、多くは織機を何台か運転している織屋(おりや)の息子で、私の家は呉服屋だから、まあ関係ない。

入学後は、教室で勉強することは少なく、鉄砲担いでの教練や、軍需工場や飛行場(防空壕堀)、農家での田畑作業などが多かった。

4年生の時、5年生と一緒に、御殿場の隣にある富士瓦斯紡績小山工場へ泊まり込みの動員となった。その年は、敗戦一年前で、敗戦の年の3月には、B29が編隊を組んで富士山をめがけて飛んできて、富士山上空で進路を東京に向けて飛行するのがよく見えた。

3月末になって、もう一年、卒業するまでこの工場で働くのだらうと思っていたところ、付き添いの教師から、「おまえたち4年生も5年生といっしょに卒業することになった。ついては、これから、就職先を発表するので、4月1日にそれぞれの就職先へ行くように」と指示された。

私は、四日市の陸軍製絨廠。「みんなは、それぞれ3人とか4人とかで、東洋紡、鐘紡、近江絹糸などへ行くのに、なんで私だけは一人で、軍の工場へ行くんですか」不満だとして聞いたら、「一人と行ってきたから…」の答えでどうにもならなかった。

四日市の陸軍製絨へ

4月1日、親父に付き添われて、舞阪駅から東海道線で名古屋へ、関西線に乗り換え四日市駅で下車。「四日市は、暗い感じの町、好きになれそうにない所」が第一印象だった。この日、名古屋、岐阜、彦根などの工業学校紡織科卒業生が、それぞれ3人とか4人とかの複数で10名あまりが入った。

軍属になるわけで、軍人以外にも階級があり、一般工員は「工員」、私たちは「雇員」、その上は「判任官」「勅任官」と、星の色も違ってくる。

指導係は、士官学校を出ていないので、いつまでたっても上の階級になれない「准尉」で、最初の訓示は「おまえたちはろくに勉強してないだらうから、下手に現場で手を出すな、なんでも知っているふりをして歩いている」であった。その通りなのだが、ただ歩いているわけにもいかないので、防空壕堀をしていた。2ヶ月ほどたったとき、その防空壕が役に立った。

6月中旬、中小都市ではわりと早く、米軍のB29による爆撃が始まった。先ず市街地を焼き尽くした後、3回目以降に、太平洋戦争を始めるために急遽建設されたという海軍燃料廠が、空襲でやられた。製絨廠とはさほど離れていないところなので、防空壕の中で、シュルシュルと不気味な轟音で落とされる焼夷弾に震えていた。空襲警報解除になった後も、ドラム缶が空中高く舞い上がり爆発していた。

次は、製絨廠だと誰もが思い、製絨廠は急いで機械設備を疎開することになり、岐阜県高山市近くの細江村と、金沢市の隣町にある松任町に分散疎開した。

「おまえは、女子工員(数名)を引率して松任町へ行け」との命令で、6月中旬、関西線、高山線と乗り継いで、引率といっても、私より年長の女子工員に助けてもらって行った。当時、16歳であった。このときも、新入生では私一人であった。

松任町は、“朝顔につるべとられてもらい水”の加賀の千代女の町で、平和そのものの町であった。福井、富山と空襲にあったが、金沢は免れていた。休日には電車で金沢へ出かけ、川べりの喫茶店で過ごしたりした。溝には泥鰻がたくさんいて、現地採用の女子工員に教えてもらいながら泥鰻すくいをした。

工場は、民家の土蔵などを借りての、反毛と織布の工場で、8月15日に据え付けを終わり、昼から運転を開始することになった。「正午に天皇陛下の玉音放送があるので、全員事務所へ集合」の命令があった。「勝利を目指して汝臣民奮闘努力せよ」といったことだろうと思って行った。神様の声はよく聞き取れない。初老で主任の判任官は涙を流していた。天皇陛下じきじきの放送で感激のあまり、涙しているのだらうと思った。放送が終わったので、職布工場の工員に「さあ、これから運転を始めるから、行こう」と言ったら、所長の大尉が「戦争に負けた。もう仕事をしなくてもいい。あとは本廠の命令を待つ。」と止められた。

戦争に負けた、口惜しいとは思わなかった。“家へ帰れる”と嬉しかった。8月末まで、後片付けをやり、浜松へ帰った。母親は「のんびりしていればいい」とねぎらってくれた。

ふたたび四日市へ

敗戦の明くる年の1月、「公用」の印を押した、陸軍残務整理部からののがきが来た。「2月1日、寝具を持参して出頭せよ」親父は戦犯容疑か？と心配したが、捕虜がいたわけでもなし、戦犯ではないから、とにかく行ってみると、このときは一人で行った。

残務整理部は官舎(社宅)にあり、行ったら、戦争中は遠くから一、二回見た程度の雲の上の廠長が、少々の肩章を外してあったが、和室の机に構えていた。呼び出されたのは、一年先輩の彦根出身者と、同期の名古屋出身者と私の3人だけであった。先輩が戦争中さながらに「申告します。3名ただいま出頭しました。」と直立不動で振る舞うので、私も直立不動。「ご苦労、本日をもって東亜紡織株式会社(本社は大阪)に払い下げ、泊工場となったので、おまえたちもここで働け」との命令？である。

つづいて、東亜紡織の勤労課長に引き渡された。「給料はなんぼ、もろとった」と聞くから「43円」と答えたら「なら、45円にしとこう」。もっと高く言えばよかったと思ったがあとのまつり。

今回も、自分でということではなく、意味不明のがきで呼び出され、東亜紡織の従業員となり、四日市市の住民となった。

工場には、機械設備はなく、倉庫に製品が積まれてあり、最初の仕事は、警備係であった。時々、泥棒が入り、一度は警備員仲間に泥棒と間違えられ、棒で押さえつけられ、外灯の下で「おれだ、おれだ」と大声を上げ難を逃れた。

その年の夏過ぎ、疎開した機械設備を引き取りに行くことになったと、本社の監査役と、工場長との3人で、高山市近くの細江村に行った。工場長は関係者に挨拶をすませて帰って行き、現地採用の日雇いの人たち数人と、川岸に雨ざらしになっている機械を運び出し、日通が貨車で送り出す作業であった。寝泊まりは事務所に借りた家で、冬の夜中にピーンという音で、一升

瓶が割れたり、雪が屋根の高さまで積もり、人々は家の前に一人が通れる空間を作り、行き来していた。

休みの日には、高山に行って、その頃出始めた、雑誌『人間』とか『世界』を買って読んだりしていた。

明るる年の春、引き揚げの目鼻がついたので、泊工場へ帰った。織機が運び込まれ、据付が進んでいた。私は、機織(職布)工場勤務となった。主任は製絨廠時代に監督官として民間工場に恐れられていた中尉であったが、民間工場となり、立場は逆転、工場長や課長から「君」づけで呼ばれていた。

労働組合結成

東亜紡織でも、GHQの方針で、労働組合作りが急がれていて、私は、職場で準備委員をしている主任に頼まれ、ガリ版印刷を手伝っていた。工場長が廻ってくると、「ご苦労さん」と声をかけてくれた。結成大会では来賓として工場長がお祝いの挨拶をした。執行部役員には、各職場の主任クラスが多かった。

その頃の泊工場は、各職場の機械設備もすすみ、さしあたっての工員は、大垣工場などのベテラン工員が主流で、「振られて池に飛び込んだ、助けろ」「彼氏に会いに堀を乗り越えていった」などと、退廃的な風潮があり、いやな思いでいた。

工場内には演芸場があり、従業員で作られた楽団を中心にして、人絹のドレスをまとって歌う歌謡曲大会や、三度笠に合羽のいでたちのやくざ踊りが盛んであった。

製絨廠時代には、紡績工場という趣ではなく、軍隊といったことであったが、泊工場では、話し言葉も、雰囲気も、自堕落さもあり、先入観の“バタンコ”を感じだされるものがあった。

労組結成以後、青年部も作られることになり、同じ職員寮にいた米沢高専卒にさそわれて役員になった。

労組文化部長は染色科の初老の人であった。青年部から私が文化部員になったことで、機関誌の編集や図書館の管理を任されるようになった。副部長は同じ職場で、楽団のリーダーをしていた人であった。いつまでもこんなやくざ踊りをやっていていいのかなと、思っていた。

青年部役員になったことで、東亜紡織労組本部会議にも出席するようになった。会議が終わるとただちに麻雀台を囲む役員たちとは別に、長い髪の毛をかきあげながら読書をしている、四日市の隣町、三重郡楠町の労組支部長がいた。私も勝負事は苦手で、その人と話しをするようになった。訓覇也男(くるべまたお)といい、楠工場寄宿舎教務主任で、長兄は東本願寺の改革派リーダーで宗務総長である。浦和工場の支部長は若者で、教員をした人。その後、この3人で、女工哀史を乗り越える文化活動をやろうと「東亜文化会議」なるものをつくり、編集長を交代で同人雑誌を出すことになった。2号まで出したが、浦和工場が売却され、廃刊になった。やくざ踊りに代わる文化活動は、廃刊で頓挫した。

新制中学校卒業生の集団就職

1949年(昭和24年)4月、教育基本法制定で、新制中学第一期卒業生が集団で就職した。長野県伊那谷からが多く、三重県南勢地方からも来た。

新入組合員労働講座で最初の接触をもった。やくざ踊りにはない、新鮮さがあった。「紡績女

工]ではない「新中学生」の雰囲気を感じた。この娘たちとなら、「女子労働者」として一緒に運動がやれると思った。

東亜文化会議中止以来、なにかしなくてはと考えていた。楠工場のくるべさんのところへもたびたび訪れていた。その頃、なにかのきっかけで、プロレタリア文学なるものを知り、小林多喜二、徳永直、佐多稲子などの小説を読み、感動した。社会主義なるものに興味を持つようになった。くるべさんの社宅に行ったとき、棚から戦前の非合法雑誌「戦旗」と取り出して見せてくれた。「文化運動をしていると、社会主義や共産党にかぶれてくる。会社が神経を尖らせているから、その方面の本は部屋の本棚に出しておくな。その代わりに反共の本を置いとけ…」と言ったので、ベストセラーになっていた小泉信三「共産主義批判の常識」新潮社発行を買ってきて置いた。中味はまったく見ていない。

本屋通いは、名古屋にも出かけ、社会主義観会の本を多く扱う書店に行ったとき、分厚い、値段も高い、民主主義文化連盟の『文化年鑑』が目につき、開けてみると、全国単産の、国鉄、全通、鉄鋼労連などでやられている文化活動サークルが載っていた。「サークル活動で文化活動を推進する」など、威勢のいい文言が並んでいた。「これだ!」と思った。

「紡績女工」ならに、新制中学校卒の「紡績女子工員」を発見して、サークル活動をやろうと考えた。その頃、労組代議員会で文化部長の互選があり、楽団長と私が候補に上げられ、私が当選した。これは、戦後の解放感で歌謡曲ややくざ踊りが流行したが、いつもでもそれでいいわけではない、この辺で新たな文化活動をしなさい、ということで文化部長に私を選んだと、受け取った。

工場には、新制高校卒業生も入社してきた。三宅昭夫、滝沢清一、南谷俊雄といった青年労働者も新鮮であった。この人たちと文化活動をやろうと部員になってもらった。

集団就職も、二期、三期と続き、工場内は「紡績女子工員」が主流となった。

サークル活動を始める

『文化年鑑』を手本にして、文学、演劇、音楽、映画の4サークルを作ろうと呼びかけたら、大多数の女子工員が参加した。

文学サークルは、「回覧ノート」などに思いのまま書き、文集『あゆみ』に編集、発行した。しばらくすると、書く事がなくなった。2号でとまった。『あゆみ』を、くるべさんの指導でやっている楠工場のサークルの人たちに送ったら、「泊まりの人たちには生活がない」とか「こんな内容のない文章をいくら書いても、丸太棒を積み重ねただけのもので、簡単に崩れるだけ」といった批判が返ってきた。そう言われればその通りで、反論はできない、頓挫した。

音楽サークルは、中学生時代に学校で歌った「花」「ローレライ」とかを合唱していたが、これも興味をなくしていった。

演劇サークルは、男性が少ないので、いきおい少女歌劇みたいな女性が男役になる劇であったりして、当時、新協劇団を脱退して「ベリてせるくる(たぬき座)」を結成した真山美保さんや、佐野浅夫、下條勉、草村公宣といった劇団員が、公演先がなく、くるべさんが世話をして、楠工場と泊工場に一ヶ月近く逗留していたので、劇の稽古を見てもらった。「労働者がなんでこんなつまらない芝居をやるんだ」と怒られたりしたが、サークルの中心になった人たちは、次の劇では、裏方に回り、新人舞台に出すことで、続いていた。

真山さんたちは、その後、新制作座となり、「泥かぶら」の劇で全国公演をやるなどの脚光をあびたが、この頃は目が出ないで、三宅昭夫さんが自転車の後ろに真山さんを乗せ、近くの紡績工場を廻って、公演を頼んだりしていた。

映画サークルは、四日市映画サークルで、映画鑑賞をしていた。三宅さんは、四日市での運

営にも携わっていて、「自転車泥棒」「米」「無防備都市」などのイタリア映画とか、「女一人大地に行く」などの邦画上映と鑑賞活動などをしていた。

生活記録運動を始める

文学サークルと音楽サークルが停滞していた頃、『山びこ学校』の本が出た。(1951年・昭和26年)それと『青年歌集』のうたごえが始まっていたことを知った。

『山びこ学校』は、市内の本屋で見た。手にとったとき、表紙カバーの絵にまず惹かれた。伊那谷に通ずるものを感じた。坪田譲治さんの「すいせんの言葉」にある、無着成恭先生の教え「いつも力を合わせていこう。…いつでも、もっといい方法がないか、探そう」に、これだ！と感心した。労組文庫の担当をしていたので、この本だけは5冊購入した。文学サークルの人たちに回し読みをすすめた。

うたごえは、どこからか覚えていないが『青年歌集』が出る前で、三つ折りか四つ折りかの「うたごえ」と題したパンフを、出るたびに手に入れ、音楽サークルに渡した。カチューシャ、ともしび、仕事の歌などで、整列して歌うものではなく、スクラムを組んで歌うことで、またたく間に広がった。

『山びこ学校』と『青年歌集』の、生活記録とうたごえは両者が結びついて、それまでのジャンル別サークルから、なんでものグループ活動に変化していった。グループは、昼専、交替番(早番・遅番)別につくられた。

『山びこ学校』に学ぶでは、「労文(生活記録)教室」で、山びこ学校の生活記録を読んだ感想を話し合うことから、自分たちも書こうと進んだ。

江口江一の「母の死とその後」は強烈であった。「ぼくの家は貧乏で…」にはじまる綴り方は、他人事ですませるものではない。

「私たちも、山びこ学校のような綴り方を書こう」となったが、簡単にはいかない。貧乏は恥ずかしいこと、人前にさらけ出す事ではないと、固く思ってきた、だけど、山びこ学校の中学生の書いた、ありのままを綴った生活記録を読んで感心した自分との間で悩んだが、いえのびんぼうつづりかたをかいた。読み返して、本当のことだけに自分以外には見せられないと強く思った。

「書いた綴り方を持って集まろう」となり、30人ほどが集まった。誰も出そうとしない。横にいた尾崎(現・外立)八重子の綴り方を取り上げて読んだら、八重子は泣き出した。他の人たちはほっとした顔をしていた。貧乏なのは私の家だけではなかった…と、安心?したかのようで、次々出した。田中(三宅)美智子がガリ版原紙きりをしてくれて、最初の文集「私の家」ができた。文集をつくって終わりではなく、書いた綴り方をみんなで話し合い、話し合ったことをまた書く、活動する、そうした生活記録活動をするようにした。

「なんで家は貧乏なのか」「百姓が作ったものは、自分で値段が決められないで、買う方が決める。肥料などは売るのが決める」「給料には家への送金分は入っていない」「家で貧乏を背負って働いているのは母ちゃんだ…、私もいずれ母ちゃんになる…」

書いた綴り方での話し合いは、それまで気づかなかったことを、具体的に分からせてくれる。次に、私はどんな母親になればいいのか、「私のお母さん」を書き、自分はどんなお母さんになればいいのか、もっとお母さんのことを知ろうと「母の歴史」を書くということで、生活記録活動を進めた。

1962年(昭和27年)日本作文の会が、岐阜県中津川市で、第1回作文教育全国協議会を開催することを新聞で知り、綴り方なかま3人が参加した。講師として招かれていた鶴見和子さんと、中津川で初めてお会いした。そのことがあって、当時の労組本部の幹部(赤坂常之進委

員長)は泊支部で始まった生活記録活動を高く評価していたので、8月末、鶴見さんを招いての、講演会、話し合いの会などを二日間、泊工場で開催してくれた。鶴見さんは、挨拶代わりに「道成寺」の踊りを、工場内のお稲荷さんの芝居で踊ってくれた。いまは泊工場はなくなり、イオンのショッピングセンターになっているが、お稲荷さんだけは元の場所に今もある。

生活記録への攻撃

生活記録とうたごえのサークル活動は、工場内で活気を帯びてきて、女工哀史を塗り替える繊維産業女子労働者に成長していった。無着先生の六つの教え「なんでも、なぜ?と考える人になろう」などは、女工哀史の時代から、会社の言いなりに動く工員を望み、支配してきた紡績工場の労務管理に真っ向から敵対することで、会社と、その御用化する労組幹部にとって由々しきことで、攻撃、圧力がはじまった。

田中(三宅)美智子が外出したとき、道端で子どもがお手玉をして遊んでいた。お手玉を落としたとき、「紡績女工が通ったんで、落としちゃった」と言った。寄宿舎の部屋に帰って話したら、みんな怒った。だけど、寝て、起きて、ただ働くだけでは、軽蔑されてもしょうがないと思った。そのことから、朝鮮戦争の特需景気で、会社はどんどん工員を増やすのに、収容する寄宿舎は満杯で、いさかいが絶えない、こんなことでは、生産増強などおぼつかないといった、寄宿舎生活ありのままの生活記録が書かれ、文集に載った。

化粧室まで寄宿生を詰め込む有様で、寄宿舎自治会や労組は、声を大にして、寄宿舎増築の要求をしていたが、会社は金がないとして、要求ははねられていた。ところが、この生活記録は、増築を要求したものではなかったが、だれがみても、増築しなければならない説得力がある。金、経済で片付けられるものではない。増築は実現することになった。生活記録にはこうした効力もあるのかと、感心していたら、工場長から呼び出しがあった。最初の圧力である。「あんな危険な綴り方を書かせるようなことをするな・・・」であった。

こうした生活記録活動について、このあと、たびたび圧力、たまにはアメでの、呼び出しが繰り返された。わたしの職場は、工場の一歩の奥にある機織工場で、事務所へ行く途中に試験室がある。「また呼び出しかな・・・」三宅昭夫さんに声をかけられる。労組事務所も途中にある。あきらかにこれは労働運動に対する不当労働行為で、会社側はしてはならないことである。

高山へ一緒に行った初代工場長は、落ち着いた太っ腹の人で、いちいち呼び出してあれこれ言うような人ではなかったが、二代目は、図体はでかいが小心者で、名古屋弁丸出しの、落ち着きのない人で、いつもそわそわしている人であった。

わたしの叔父が、日本軽金属蒲原工場長をしている頃、社用で四日市の富士電機に来たとき、工場へ面会に来た。ついでに、工場長にあつて挨拶すると言うので、そんなことしなくてもいいと言ったのだが、会ってしまい、それ以後、「立派なおじさんに君のことを頼まれたから・・・」と余分のことまで、お説教の材料にされてしまった。

あるとき、こうした呼び出しについて、不当労働行為だからと、電気科主任の労組支部長に話したが、「大変だなあ」と言うだけで取り合おうとはしなかった。

こうした呼び出し、圧力で、思ったことだが、ついにはクビになるのだけれど、こうした圧力行為がなかったら、運動は続いてきたかな?ということである。弾圧は私にしても、なかまたちにしても、逆に、その都度、負けられんとがんばることになる力をつぎ込んでくれたらと思えてならない。何も悪いことをしていない。生活記録は良いものとの信念が身につけていて、それを壊そう

とするものに抗したと言っていい。

それにしても、生活記録活動については、とにかくいろいろあった。

破防法(破壊活動防止法)反対で、珍しく全織同盟も制定反対ストライキを決めたことがあった。当日、職場ごとに、「この係は多忙だから作業続行、ここは暇だからストに行け」と、主任が決め手のストがあった。(この程度のストでも他の組合はストはしなかった)

大会は演芸場で行われた。革命でも起こしそうな激烈な発言をする組合員がいた一方で、一番前の席に座っていた綴り方のなかまの一人が、「中学校の社会科で、ストライキっていうのは、仕事を止めて、労働者の要求を通す手段だって教えてもらいましたが、今日のストは、会社の仕事に協力していますが、これはどういうことですか」質問が出た。幹部はまともに答えられなかった。私は、さすがだと質問した娘に感心した。

革命発言の方は、その後、何も問題にされなかったが、スト発言(まさしく、生活綴り方で大事にされている“概念くだき”である)の方は問題にされ、主任会議で、電気科主任の支部長が工場長から叱責され、「あれは澤井がけしかけたこと・・・」と弁明したことを、ある主任がこっそり教え、「工場長から呼び出しがあるで、あれは北村(支部長)が責任逃れで言っているって言えよ」と教えてくれた。呼び出しがあったとき、それは言わないで、「新制中学校でそう学んできたことだから・・・」と、言っておいた。“さすが生活記録活動の成果”と、このときも、圧力よりも、このほうがうれしかった。

こんなことだからか、これ以後、自分が困ると「あれは澤井のせいだ」と言うやからも出てきた。澤井の利用価値が出てきたということだが、それを鵜呑みにする工場長はお粗末な人間ということになる。

昼食で食堂へ行った。手前に労組と会社の掲示板がある。労組副支部長が「原爆」の写真を展示していたので手伝った。しばらくして、警察の警備係が、何処からか来て、その後何処へ回すのかと調べに来たことを知らされ、工場長から呼び出しがかかった。「副支部長が、おまえに言われて展示したと言っていた。正直に警察に答えろ。」これには参った。私が解雇後勤めようになった地区労(全織同盟で加盟していたのは東亜紡織泊支部だけ)からだろうと思ったが、当時労組役員でもないし、事前に、どこからどこへも聞いていない。警備係の警官は3人できていた。知っていても言うわけにはいかない。逆に「何で、こんな事を調べるのか」と聞いたら、ろくに答えようとしなかった。工場長に副支部長のことで弁解しないでおいた。

ムチだけではだめだということか、「会社の文化部長になったつもりでやってくれたら、社員待遇を格上げする」とか、「特別ボーナスを出す」と言われたりしましたが、断った。

次のアメは、原動と事務課長の二人に、三宅昭夫さんと私が夕食に誘われた。四日市にこんな店があったのかと思う上等のフランス料理店で、「なにもくどくど言わなくても分かるやろう。工場長を困らすことはするなよ・・・」あとは、「呑め、呑め」で、三宅さんは酔いつぶれてしまうほど呑まされた。私はまったくの下戸で呑めない。二人の愚痴やら、なにやらを一人で受けるはめになった。二人は自腹ではなく、社用なので、フランス料理店の後、バーを二軒ほど付き合わされた。なんのことはない二人の酔っぱらいを介抱するはめにもなった。二人は工場長にどんな報告をしたのか分からないが、三宅さんも私も、接待前と変わることはなかった。

工場長は、ここまででも駄目かと悟るべきなのに、諦めようとはしなかった。

社員は、本事務所においてある「出勤簿」に判を捺すことになっている。あるとき、その係をしている通勤の女子事務員がこっそり教えてくれたことがあった。彼女は、綴り方グループでもなし、何でと思ったが、私が工場長に呼び出されるのを見ていたことで、同情してくれたのかもしれない。

「寄宿舎の青木先生(教務主任で、この男が綴り方をやめさせる働きかけの大将であり、寺の出身で“青木坊主”と呼ばれ軽蔑していた(楠工場のくるべ三とは大きな違いである)が、この伊那の保護者会長宛の手紙を持ってきて、切手を貼って投函するように頼まれたんだけど、澤井さんたちの綴り方をやめさせようとしていて、この中の文を書き写して工場長に出したら、工場長が喜ぶって書いてあるの・・・、覚悟しておいた方がいいわよ」と中味を見せてくれた。

しばらくして、その手紙は伊那保護者会会長から、工場長宛の手紙として、大きな紙に書かれ、掲示板に貼りだされた。呼び出しがあった。「それは青木坊主がこれこれで・・・」と喉まで出かかっていると言うわけにはいかない。文集「母の歴史」について、「あんな貧乏綴り方を書くのはやめてほしい」といった内容で、年末年始の休みに、滝沢清一さんと伊那へ行き、保護者会長に「この母の歴史の文章について、どういうところがいけないのでしょうか」と聞いたら、「ほう、これがその文集ですか」と拾い読みして、「この通りですな、悪いことはありません」と感心していた。

紡績工場での労働運動は、採用先現地での保護者対策で決まると、このやりとりから思った。綴り方のなかまも、職場や寄宿舎でのお説教、圧力には抗しきれぬが、家からの働きかけには、弾圧反対とか、生活記録は何も悪いことではないと言っても、なかなか通じない。三重県南勢から来ていた綴り方のなかまの一人が、「チチキトクスグとカエレ」の電報で帰ったが、実は「アカの綴り方に入っていて、あれでは嫁の貰い手がないから、止めるように説得を」と連絡員(募集人)に言われ、ニセの電報で呼び寄せ、綴り方グループから抜けると約束すれば、工場へ返すと父親が言っている、というので、出身中学校の先生に、その娘の家へ行って説得してもらうために、四日市の教職員組合から頼んでもらい、私に同行してもらった。澤井というすこぶる悪いやつにたぶらかされていることにもなっていたようで、その娘の家に行ったら、「あんたが、澤井という人ですか」と安心したような顔をしていた。

連絡員が家へ行ってのおどし文句は、「あれでは、嫁の貰い手がない」である。多かれ少なかれ、生活記録をやめない人たちに、家から来る手紙は、そうしたおどしに、親として心配で「素直な子になったださい」「会社の言うことを聞いて、よい子に」とか、なかには「澤井という悪い人にだまされないように」といったこともあった。

あるとき、横山(小柳)みのりが、深刻な顔をして、何人が集まった席で「わしなあ、あなたのような頭のいい人が、なんであんなアカの綴り方に入っているのか心配でね、家でも心配しているでしょうし、あなただったら、きっといいお婿さんが見つかりますよ・・・」と寄宿舎の世話係(舎監)の先生に言われてな、わし、思い切って、綴り方をやめようと思うんだけど・・・と、話した。「あなたのような頭のいい・・・」は、これまで言われたことのない殺し文句であり、ふらっとくるのもうなずける。「何言っているの、わしだって、頭がいいって言われたよ・・・」他の人たちも、内心、「頭がいい」と褒められ、いい気分ではいたが、殆どの人が「いい」と言われていたことが分かり、なんのことはない、一同「馬鹿にするな」と怒り、よりいっそう綴り方に深入りするようになった。

こんなこともあった。整理工場の洗絨職場で、私とは反対番の責任者をしていた大学卒が、私に頼みたいことがあるという。「工場長に大学卒が集められ、これから澤井を見習え、廊下な

どで澤井はすれ違う女子に 15 度頭を下げて挨拶している。そのほか、澤井を監視して、澤井が女子になぜ人気があるのかをさぐれ、まねをしろって言われて困っている。それよりも頼みたいのは、むつかしい本を買わないでください。澤井はこういう本を読んでいるって言われ、おまえたちも読めって言うんだけど、とてもじゃないが読む気がしません、なんとかなりませんか・・・」そんなこと頼まれてもどうしようもないが、ほとほと困っているようなので、本については、「迷惑をかけないようにします」と約束し、なじみの本屋を代え、寮の本棚に本を並べないようにした。この頼みを聞いて、少々得意にもなったが、素行に気をつけなければいけないとの思いを強くした。

労組役員を辞めていたとき、工場内の風呂場で、試験科主任で、副支部長でもある人と一緒になった。「工場長から聞いて来いって言われたから聞くんやが、今度の労組役員選挙に出なかつたら、社員待遇を格上げする、どうするか返事を聞いて来いって、どうするかな」と聞かされた。現副支部長に言われて驚いた。役員に出るつもりは毛頭なかったが、それを聞いて、副支部長に立候補することを決めた。「考えておきます」と返事をしておいた。

立候補締め切り直前に立候補を届け出た。なかまたちは、そんなことを事前に聞いていなく「出るなら、なぜもっと早く言わなかったのよ」と怒られた。出ることに意義があり、当選は二の次であったので、事前に相談はしなかった。少しの期間だったが、なかまたちの運動で、三人立候補の二番目になり、いずれも過半数に達していなく、上位二人の決選投票になり、私が当選した。

社員の格上げは気にはしていなかったが、同時入社の男とともに格上げになった。伝達式が終わり「澤井だけは残れ」と、工場長、課長の 4 人に代わる代わる、お説教をされた。昇格をすることは分かっていた。余程のことがない限り、同期生と一緒にあげないわけにはいかない。アメを前にぶら下げられて、とびつくなよ、上がるときにはアメをしゃぶらなくても上がるんだから・・・と、みんなに大声で知らせたかった。

それは、例の、通勤事務員が、「山さんが工場長に呼ばれて、小使室で、ひそひそ話をしていたから、山さんを警戒していた方がいいよ」と教えてくれた。案の定、労組代議員会での発言が、それまでは、綴り方に文句を言ってなかったのに、理屈に合わない避難発言をするようになった。このときも、「何日の小使室で、工場長に何を言われたのか。工員の格上げは、年数がきていたから、何もしなくても上がったんですよ」と言いたかったが、言うわけにはいかず口惜しい思いをした。

こうした綴り方活動について、私だけではなく、それぞれに、職場で主任などに綴り方を止めるようにとの説得、圧力を受け、寄宿舍へ帰ると舎監が待ち受け、お説教、圧力を受けていた。中には、「あの、この頃おかしいよ、綴り方に出てこなくなって、舎監となんかしてるよ」というのも出てきたが、責めることはしないでおこうと話し合っていた。男性も、「おれなあ、もうもたんで、綴り方から引かせてもらって悪く思わんでくれな」と離れていく者もいた。進んで、他工場へ転勤する者もいたが、非難しないことにした。革命をしているわけではなく、工場内での圧力に抗するのは大変である。非難などできない。

懲戒解雇となる

生活記録での決定的なムチは、1954 年(昭和 29 年)6 月、『母の歴史』出版企画である。鶴見さんから澤井にあてて手紙が来た。その手紙は今も私の手に渡っていない。会社が私に渡さなかった。

8月、秋田で作文協議会があり、有給休暇をとって参加した。鶴見和子さんに会うなり、「なんで返事をくれないのよ」と言われてわかったのは、光文社と河出書房が生活記録の本を出すとやってきた。かっぱボックスのほうは、全国から集めて編集する。河出新書は生活を記録する会だけで編集する。河出の方がいいと思うが、みんなで相談して返事をほしいとの手紙であった。

私は、労組役員を辞めていたので個人で行った。文化部長をしていて、一緒に劇をやった事がある和君が「僕は労組で行くようになったので、一緒に行ってほしい」というので、その通り受け取って行った。中野重治さんや国分一太郎さん、鶴見さんと話をする時も、彼は私の側に居た。会社に帰ってから、その一部始終を彼は工場長に報告していた。

8月中旬頃、大阪の本部役員たちが、私が住んでいる寮に集まって来ていた。いつもだと、顔を合わせれば挨拶くらいはするのに、会いそうになると、顔をそむけていく。おかしい連中だなと思った。

あとで聞かされて分かった事は、工場長から頼まれて、澤井解雇をスムーズに行なう方法を考えてほしいということであった。市内の料理屋での会合もふくめ、本部・支部役員が謀議に關っていた。

8月末頃、就業規則の細則に「賞罰審査委員会」があることを見つけ、これでいけるとなった。労使同数の委員で、可否同数の場合は委員長の工場長が決済するとある。これなら、労組側は安心して解雇反対ができる。会社側は解雇賛成で、同数となり、後日工場長が決済することになる。

この事態に、三重県地方労働委員会会長の弁護士に相談に行った。「こんなことでクビは無理。それでもクビになったら地労委に救済の申し立てをしなさい。解雇無効の決定をだしてあげるから」と言ってくれた。一方、綴り方なかが中心になって、職場で、寄宿舎で、時間を決め、一斉に解雇反対の署名活動をやってくれた。半数以上の署名が集まり、綴り方れグループとはなんの関りもなかった中年男子が代表をかって出て、工場長に「従業員の過半数以上は澤井解雇に反対だから、これを参考にして解雇しないでくれ」と、署名を提出してくれた。嬉しかった。

直接の工務課長は「わしは最後まで反対したが、君を守れなかった。この上は、懲戒解雇となると、あとの就職に悪い影響が出る。退職願いをだしてもらえれば、わしが責任をもって自己退社にするから、そうしたらどうか」と、心底私のことを思って言ってくれた。こういうのにはほろっとくるが、「ありがたいですが、なかまのみんなが、裁判をしてがんばれと言ってくれているし、親父も来て、お前のいいようにしろ、なかまの人たちの善意にそむくようなことはすると言って帰っていったので、退職願いは出さないようにします」と答えた。

その課長については後日談がある。私が地区労働めをしていたところへ、その工務課長夫人が訪ねて来た。「夫が、あのあと楠工場へ転勤になったんですが、澤井さんのことをずっと気にしていて、すまんことをしたと言っていました。その夫が先日亡くなったんですが、会社は早いうちに社宅を出るようになって言うんですが、今のところ行き先がありません。それで、澤井さんのことを思い出して相談に来ました。」大変困っているようなので、その頃、私が解雇されたとき、なにかと世話をしてくれた教職員組合の役員をしていた高臣亮祥さんが楠町長をしていたので、高臣さんに相談したら、住み込みの保育園用務員さんの欠員があるからと引受けてくれた。

9月15日、「懲戒解雇」の辞令を工場長からわたされた。勤めだして9年になる。労組の代議員会は、「もし裁判闘争をするのであれば、資金カンパはしないが、弁護士の斡旋などの精神的援助をする」と決めた。

地労委会長の弁護士のところにクビになったので、地労委への申請をしたいと行ったら、「先

日はああ言いましたが、これはかんたんにはいきませんよ」とまるで反対の対応で、代理人も引受けられないというので返ってきた。この間に会社からの接触があり、訴訟の時には会社側の代理人になることが決まっていた。

大阪本社の社員で、知らない人から電話があった。「工場長が本社へ来て、津の裁判官を買収する資金を出してほしい」と言って来たが、本社ではそんな金船せない、工場で解雇したんだから、工場の責任でやれと返事したが、津の裁判所には行かないで、本社が大阪だから、大阪の裁判所に提訴したほうがいいですよ」と教えてくれた。見ず知らずの人に感謝した。

弁護士については、四日市の教職員組合が相談にのつてくれ、日教組から大阪総評へ話が行き、関西大学非常勤講師をしている、労働事件での第一人者とされていた弁護士に代理人をしてもらうことになった。

訴状は早いうちに出来上がった。出すときには連絡すると言われていたが、半年ほど経った頃、工場内で、どうやら澤井は裁判を諦めてようだとのうわさが流れていると聞いた。

河出新書『母の歴史』は、解雇になった年の暮れに、木下順二さんと、鶴見和子さんの編で出版された。

その鶴見さんが心配され、木下順二さんと日高六郎さんに、弁護士に会い、どうなっているのか質してほしいと頼まれ、私と3人で大阪の弁護士事務所に行った。弁護士は澤井がこんな有名な文化人と知り合いであることを知り、訴状を出す事をためらっていた一部始終を話してくれた。

澤井に代理人を依頼されて以来、主に全織同盟の本部役員と、「繊維レポート」の記者がたびたびやって来て、「澤井がもしも裁判で勝って工場へもどって来るようにでもなると、東亜紡織だけでなく、全紙同盟にも悪い影響が出て、大変なことになる。なんとか裁判にならないようにしてほしい」とか、「澤井は名うての悪で、代理人を引受けられた先生にも、傷がつくと、人を変え、何度でも言うてくるので、一体澤井っていうのはどんな男なのか、しばらく様子を見ようと控えていたんですが、澤井君がこうした先生たちに助けられている事を知り、私が全織同盟の幹部などにたぶらかされていたことがわかったので、すぐにでも、「訴状」を出します、きっと勝訴するようちこやります」と約束してくれた。

裁判は、地労委会長の弁護士が被告会社側の代理人で、原告澤井側の弁護士とは、法廷内のふるまいが明らかに差が出ていた。傍聴席には本社と工場の課長たちと席を同じくして、本部・支部の役員連中が居て、澤井側には、毎回、四日市の教職員組合委員長と、綴り方グループの2、3人が交代で休暇をとり、来てくれた。ときには、芝居づくりをしていた、俳優座スタジオ劇団・三期会（現・東京演劇アンサンブル）の人たちや、木下順二さん、日高六郎さんも来てくれ、そんなときは、弁護士がわざわざ裁判官室へ行って、多忙な有名文化人がきてくれているので時間どうり審理をはじめてくださいと言いにいき、最前列の傍聴席に木下さんたちに座るように頼んでいた。

こちらがわの重要証人は、三宅昭夫さんで、証人席に立ったとき、弁護士が「傍聴席には、会社側の幹部と労組の幹部がいつしょになって、ようけ詰め掛けているが、それでも本当のことが証言できるか」とあえて質問した。三宅さんは「はい、ほんとうのことを話します」と、堂々と証言した。

私が、本人質問されるときには、鶴見さんが来て下さって、「会社の弁護士は意地悪い質門をして、おかしい発言をさせようとするから、どんなに意地悪な質問されても、絶対に怒ってはだめよ」と証言台に立つまで、くどいくらいに注意してくれた。

判決日が近づいたある日、「相談があるから事務所へ来るように」と連絡があり、出かけた。近鉄電車の急行に乗り、国電に乗り換え中の島近くの法律事務所へ行った。「大阪地裁の判事

が来て、判決前に和解してほしいと言ってきた。担当判事ではなく、泊工場の事務課長とは東大の同級生で、彼に頼まれたって言っていた。和解金は百万円単位だそうだ。どうする…」それを聞いて「勝った」と思った。判事である以上、担当外とはいえ、判決内容を聞いてのことだろうからと、多額の和解金にはとんと目がいかず「判決を待ちます。和解(自己退社)はしません」と答えた。弁護士は「こんな大金は判決後とか、高裁後では出ないが、それでもいいのだな」と言った。「金よりも復職したいです」とも言った。

判決の頃、生活記録のなかまは、各職場から特設の「第二補修職場」へ集められ、思想教育を始業前に受けての仕事につかされていた。なかまが集められた職場だから明るい雰囲気、一生懸命やろうと思わなくても、優秀従業員の「第一補修職場」よりも生産があがり、会社はこれには困ったようだ。

その頃、繊維不況があり、紡績特有の「操業短縮・一時解雇」が行なわれることになった。希望退職予定人員に達しないので、労使は「指名解雇」を決めた。当然のように綴り方なかまの大部分が「指名」された。「半年後に再雇用することを労使で協定している」と労組幹部が言うので、その協定書を見せてほしいと要求したら「本部にあつてここにはない」。「紡績の歴史は操短の歴史である」と言われ、一時解雇・再雇用と言いながら、その間に退職願いを書かせて辞めさせ、給料の低い新人を雇い、利益をあげてきた。

指名解雇された20人余は、こんなことでは、解雇と一緒に、帰るわけにはいかないと、いつも使っている市立労働会館に立てこもる勢いで、鶴見さんに電話でこのことを話した。「私は手の離せない用事で行けないので、誰か行ける人がいたら、夜行で行ってもらうから、それまではおとなしくしていなさい」と言われた。

あくる朝、早い時間に、木下順二さんと日高六郎さんが来られ、会社と労組役員に会い、「半年後、必ず再雇用します。帰休の間に退職干渉はしません。」を約束させ、待ち構えていた記者団にそのむね発表、翌日の新聞にお二人の写真入りの記事が出た。労使協定よりもこの記事の方が強制力がある。

この帰休中に判決があり、会社は「控訴する」とした。鶴見さんから、「これからどうするか、専門の先生にも来ていただいての相談をするから、判決文を持って東京へ来るように」と言ってくださったので、三宅さんと上京した。木下さん、日高さん、鶴見さん、教育大の磯野誠一さん、劇団の広渡常敏さんのほかに、労働基準法制定で中心になられた松岡駒吉先生が来ておられ、判決に目を通し「高裁でも充分勝訴できますから、自信をもってやりなさい」と言ってくれた。

操短で一時帰休していた上・下伊邦組みには電報で「勝訴」を知らせておいた。綴り方なかまの一人で、労組本部の書記長と結婚していた彼女からは、「だんなは、困った、困ったと言って、困っていますが、私は、澤井さんが勝って本当に良かったと思っています」と手紙をくれた。

その日の夜行で、東京から伊那市へ行き、東京でのことを話した。「会社が控訴するんだつたら、高裁でもがんばろうに…」私はそれを聞いて意を強くしたが、「わしらはな、工場へ戻ってくるまでは、結婚しないで待ってるでな」を聞いたり、三宅さんが郵便貯金通帳と印鑑を出し、「これを使ってがんばってほしい」と言われたことで、一転、これ以上続けてはいけないと覚った。

「判決で会社にも、労組にも勝らた。私たちの言い分が正しかったことの証明でもある。会社は控訴すると言っているが、もし和解したいと言ってきたら、和解してもいいかな」と言ったら、沈黙が続いたあと、唐澤和子だったと思うが「そうだよ、勝ったんだから、和解してもいいと思うよ」と言つてのけた。中心グループから少し外れたところにいた和子だから言えたと思うのだが、し

ばらくして、「そうだな、そうするか」となった。翌日、下伊那の集まりでも、同じ結論になった。

判決後の和解に、他工場の人たちから、「なんで和解などしたのか」との批判、非難を受けたが、結婚適齢期を過ぎようとしているなかまの親御さんたちにこれ以上の心配は掛けたくないと思ったのと、なかまたちが自分のこと以上に私の事を心配してくれていた事実を前に、「勝った」事実を大事にすることで報いられると思った。

ただ、申し訳なく思ったのは、裁判中、会社は三宅さんに手をつけられないでいたが、裁判が終ったとたん、辞めさせることをねらって、泉大津工場へ転勤させてしまったことである。今も、そのことについて、迷惑をかけ申しわけなく思っている。

労働争議で逮捕・起訴・刑務所入り

1960年(昭和35年)4月、四日市の地場産業・万古焼き工場で労組結成があり、私は毎日のように現地へ出向いていた。会社はモラロジー(最高道徳)という、宗教ではないと言っていたが、近江綿糸の仏教のように従業員を感化する手段にしていた。労組を結成して、これで万古焼労働者も人並みになると思っていたところ、全織など反総評の同盟の常套手段である総評が労組を結成すると、同盟は会社と取引して第二組合をつくり、御用組合化することを、ここでもやり、組合は弱体化した。

その争議には、奈良から大日本愛国党の右翼を会社が呼び、身の危険を感じながらの闘争であった。始めてやってきたとき、まず言ったのは「くるべはいるか(地区労議長)澤井(地区労事務局員)はどいつだ」で、「お前の身柄をあずかる」と拉致されたので、「ちょっとトイレへ行かせろ」と言ったら離れたので、トイレの窓から避難した。

争議は第一組合がストライキに突入したら、第二組合が操業すると並んでやって来た。先頭は、なんと、泊支部長と、サークルで一緒に活動していた原君である。こちらは東亜紡織を追い出された訓覇と澤井が先頭で待ち受けた。近づいて来て、くるべ・澤井を見つけたら、くるっと廻れ右した。原君は私に「同盟の方針で来ただけ、悪く思わんでね…」と言っていた。

私は、この争議で逮捕された。黙秘したからか 23 日、警察と津拘置所に拘留された。よくは分からないが、高い塀の外で黄色い声がすると、看守がこちらを向いて並び応答しないように監視した。出所後に分かったのは、拘置所の横を流れている川の橋から「澤井さんがんばれ」の声援に、綴り方グループが来ていたとのことであった。

刑事裁判は、津地裁で 5 年間やられた。私の罪状は、右利きなのに、左手で柔道8段の守衛長をなぐり、1 ヶ月の重傷をおわせたというもの。事実は私がその守衛長に突き飛ばされた、それを「暴力はやめろ」と抗議した男(県労協)にも暴力行為をするので、当該労組の役員が社長宅へ暴力をやめさせてくれと言いにいったら、その 3 人が「暴行、傷害、住居不法侵入」の罪で、逮捕・起訴となったものである。この裁判中に、私はこの争議のほかに、“公職選挙違反事件・法定外文書配付”の罪名が付け加えられた。地区労が総選挙で、社会党と共産党の候補者を推薦した文書を配布したのは公選法に違反するというもの。私は、配布には関わっていなかったが、津検察庁での取調べで、社会党市議二人の供述調書に「責任はあるが、実際のことはわからないので、澤井に聞いてくれ」とあった。自分で配って置いて澤井に聞けとは、酷いもんだと思う、「私は配っていないからわからない」としか答えられない。3 日目に検事が、「地元の警察は議員バッチをつけていると検挙してこない。お前ではないことはわかる、これから帰ってその市議二人に、どうするか相談して来い。市議を引っ張る事にするから…」と言われ、市議にこのことを言ったら、「そうしてくれてもいい」とは言ったものの、本心はそうではない。あくる日、検事に、「もう私にしてもらっていい」と返事したら「そうか、被っておくか」で罪名が増え、あとの二人と同じく罪名が二つになった。

逮捕は一人住まいの借家で、朝早くされたのだが、逮捕状の逮捕理由に「暴行傷害」とあった。小林多喜二の小説などから、逮捕されるときには「思想犯」みたいなことを思っただけに、これでは暴力団ではないか、馬鹿にするなの思いがあり、黙秘で通した。

前々日、私は沖縄返還要求デモで風邪をひき、休みをとっていたので、私一人逮捕されたことが知られてなくて、弁護士が警察へ来て、はじめてわかった。弁護士は「完全黙秘ではなく、保釈申請をするので、住所・氏名だけは言っておいてください」と言うので、そうした。

津地方裁判所での審理は、名張毒ぶどう酒事件で無罪判決を出した小川判事で、5年ほどかかったが、ある時、被告が一人出てきていない、電話をしたら「忘れていた、今から行く」と1時間以上開廷を待ってもらったりした。ある時には、開廷時間になっても判事が出てこない。廊下から裁判長が「澤井君ちょっと…」と呼ぶので被告席を立て廊下へ行った。裁判長は『青年教育』の本を持っていた。「君はこの本を知ってるな」と聞くから「紡績工場でやってきた生活記録活動を書いた私の文章が載っています」と答えた。「この本をある大学の先生が持ってきて、澤井は裁判にかけられるような悪いことの出来る人ではない。この本の澤井の書いた文章を読むようになって、お前はその先生に頼んだのか」「いいえ、知りません、その先生の名前を教えてください」「頼んだのではないのなら、名前は言わなくても、けっこう上手なことを書いているな」と言っていた。

こんなことがあってか、判決は懲役で執行猶予がついていたが、3人のなかで、私は1ヶ月少なかった。

執行猶予がついても「有罪」には違いないわけだし、対策会議をしていると、やけに詳しい人が居る。「おれは澤井君の後ろから守衛長を蹴ったった、こうやってな…」と言う者もいて、名古屋高裁へ控訴するにあたって、今更被告人を代えられないからと、その役員に証人で出廷してもらうことにした。当日、一緒に四日市を出たが、裁判所にはあらわれず、証人を取り下げた。「怖くなったから」と、後で言っていた。そういえば、3人の逮捕時、自宅には居ないで、旅館を転々としていた人が何人か居たことも後日聞いた。

1964年(昭和39年)12月24日、最高裁の却下判決で、津刑務所に収監するとの通知が検察庁から来た。この頃、綴り方なかまのほとんどは結婚退社などで四日市には居らず、退社後、それぞれのその後を確かめ合うために、0と5のつく年に伊那で集まることを決めていて、翌65年1月3日は第1回の集まりを下伊那でもつことになっていたが、収監で行けないむね連絡しておいた。

ところが、3人の弁護士のなかで一番若い名古屋の弁護士さんが、検察庁にかけあって、クリスマスとお正月を自宅で、その後に収監との延期をしてくれたので、伊那の集いに参加できた。「もう、脱走したの…」などと言われもした。

1月から4月にかけての3ヶ月は寒くて大変だった。「3ヶ月なんてのは、右、左を向いて居たりしたら、すぐ経ってしまう。作業場へ行く事もないから、寝起きの房で適当にやっつれ」と看守が言うので、薬袋や果物袋を糊で貼る仕事を房内でしていた。受刑者が二人になると独居房になり、三人以上になると雑居房の繰り返しで、同室になった暴力団員は「三井三池のような争議がおきないかな…」と言う。何故でだと聞いたら、「刑務所に入って居たが、仮釈放で三池へ行つて第一組合と渡り合った…」と言っていた。

保護司は受刑者とは自由に面会できるので、くるべさんは保護士になり、ときどき面会に来た。ストーブのある部屋で暖かいのだが、面会が終わると火の気のない房で、寒暖の差がはげしく、面会は良し悪しであった。保護司では、このほか、四日市で平和運動をともにやっていた婦人保護司が二人で来て「どう、気分は、なにも悪い事をしたわけじゃないし、このさい、ゆっくりしてすごしなさいよ」と気楽なことを言い、立会いの刑務所職員が苦い顔をしていた。

面会は月1回許される。税務署員の弟が面会に来たとき、弟が立会いの看守に聞かせるように、「刑務所から出て来るのを週刊誌の記者が待ち構えていて、「獄中記」を書いてもらうと言っている。それと、刑務所の扱いが酷いよだから、総評が抗議を起すといっている…」などとでたらめを並べ立てたので、あくる日の朝、ついぞ見かけたことの無い刑務所長が来て「なにかしてほしいことはないか」と、毛布を差し入れ、食事の量も増やす、面会と手紙も月2回にするなど待遇改善してくれた。生活記録のことなども、受刑者記録にとどめられていたことがあってのことだろうと思った。

この間、親父が四日市へ行くというのを、「長い出張に行っているから、行っても居ない」と、3ヶ月間だますのに苦労したようだ。その点、お袋は強いようで、兄がお袋には刑務所入りを話していた。刑期を終えて出て来るとき、刑務所まで兄と迎えに来ていた。なにも言わなかったが、ねぎらってくれているのがわかった。

最後の嫁入り

横山(小柳)みのりなどの3人が、綴り方なかまで、最後の退社組みになった。国鉄(JR)四日市駅前の下宿に、その3人が、着物姿でやって来た。「どうしたんだ」と聞いたら、「わしら今日で退社することになってな、これまでさんざん、アカの綴り方なんかやっていたら、嫁の貰い手がないって言われてきたやろ、それで、着物を着て大事務所に行って、私ら結婚退社しますって挨拶してきたんやわ。す一つとしたわ。」と晴れ晴れとした顔をしていた。大変愉快的な話で、そのときのことを想像して、笑ってしまった。ほんとうに良かったと嬉しくなった。

どうやら、みんないい嫁さんになっているようで、安心してた。第1回の集いのときに、登内(伊藤)つね子は、小さな子供を連れて「離婚されてもいいで、わしは集いに行くって出てきたのえ」と、悲壮感がただよっていたが、2回目からは、楽に出てこられた。なかには、旦那が会場へ送って来るのもあって、よかったと安心した。そのほか、結婚式の後の旅行途中で四日市へ寄り、「どうえ、わしの旦那は…」というのもあった。

ただ、なかには、結婚式寸前に、親戚が決めた結婚をきらい、家を飛び出し、愛知県で保育所の保母さんになって、治まるのをまち、その後、伊那で見合いした相手は、正月に「紡績の娘と村の青年との集い」をしたとき、2年続いて来ていた青年団長で、晴れてゴールインしたカップルもいた。「母の歴史をくりかえさなかったのえ…」と言いたげなふうであった。

“生活記録活動をしていたら嫁の貰い手がない”の会社側のおどしは通用しないばかりか、生活記録があって、その後の結婚生活が良いものになっている、と私は今では思っている、信じている。

しかし、一つだけ気になるのは、私が伊那へ行った時に、「泊まっていけ」と嫁が言うので何軒かに泊まったりする。旦那とも一緒に話をしたりもする。気分良く、伊那をあとにして、四日市へ帰る道で、まてよ、気楽に泊まって来たりするが、旦那にしたら、紡績で働いていた頃のなかまの男が、女の家に泊まる…、本当のところどう思っているだろうかと気になってしょうがなかった。

そう気にしながらも、電話で話しているときに、その家の旦那さんが、電話の横で、「澤井さんも来ればいいのについて言っているよ…」と聞くと、そんな気はどこかへ吹っ飛んで、「じゃあ、明日行くから…」と、前はマイカーで、最近には娘にマイカー禁止を言い渡されているので、名古屋から中央道高速バスで行っている。つまりは、みんな、旦那さんとなかまになっているので、私も、そのなかまに加わっているから、なかまうちの一人だと、勝手に決め込んでいて、これからも、泊めてもらうことがあるだろうと思いついてる。

結婚後の皆をみていると、男よりも女の方が、苦労を積み重ねているようにみえる。それで

も、くじけずに、元気である。もう 70 歳を越えている。

何回かの 5 年は、最近では 2 年、または 3 年ごとの集いで、いちいち詳しく話さなくても、あの人の成長ぶりを知ることができている。会社と労組幹部に、さんざんいじめられたりして、ひどいめにあったが、「綴り方を続けてきたから、今の自分があるのえ、綴り方をやらないほうが良かったなんて思ったことはないよ…」と言うのを聞くと、ほっとする。

少し前、泊工場 OB 会を、結婚式場を借りて行なうので、ぜひ出席してくれと、泊支部解散時の支部長をしていた小笠原正彦さんが家まで来て言うので、「はじき出されたのに、OB 扱いをしてくれるんやな、」と言ったら「OB には違いない」と言うので出かけた。女性はそうじて親しみをこめて接してくれたが、名前言われても、顔を見ても、思い出せない人が多かった。「ああら一よしろうちゃんじやないの、ちっとも変わってはいないね」と抱きついて来た人がいた。誰だったかな、しばらくして、保健婦さんだとわかった。芝居をやった人、同じ職場に居た人と、なつかしい人たちであった。ところが、男となると、そうはいかない。青木坊主さんが歩いて来て、私の顔を見ると、90 度曲がって行ったりして顔を合わさないようにするのと、操短騒動のとき、これでもか、これでもかと、つまらないことで、小松(服部)貞子をいじめた当時の労組役員で、工場長になった川島巖氏は、私に会うと、「よく来てくれました。夫婦で中国へ行って講習会をした時の記事が「週刊朝日」に載ったのでコピーしたからぜひ読んでください」(綴り方はアカで恐ろしいと、さんざんわめいていたのに、よくも恐ろしいアカの国へ行ったもんだとあきれた)と渡し、抱きかえるようにして壇上へ連れて行き、「みなさん、公害などで、新聞やテレビにたびたび出ている有名な澤井さんが来てくれているので、挨拶をしてもらいます」とマイクを渡されたので「工場をおっぼり出された私を招待していただいて感謝しています…」多少の皮肉をこめて挨拶した。この会に出て、男子で意地悪した連中は私を避け、しなかった男子は友好的で、機織主任や同僚だった人たちも友好的で、人間の面白さを知った。なによりも、頭目の澤井が四日市で、その後も、公害問題とはいえ、がんばっている、新聞にもテレビにも出ている有名人になっている、その事実は否定できないことであり、生活記録活動につづいて、公害を記録する運動を続けてきて良かったと思った。綴り方活動をさげすんだ連中を見返すことが出来てよかったと、しみじみ思った。